

陸連時報 三

2014
平成26年

12 月号

題字は平沼亮三(初代陸連会長)の書

目 次

仁川アジア大会を終えて(理事・強化委員長 原田康弘).....	198
第17回アジア競技大会(2014/仁川)各ブロック報告(強化委員会).....	201
「体育の日」スポーツ祭り2014報告(普及育成委員会 森健一).....	207
アジア陸上競技連盟(AAA)カウンスル会議報告(国際委員長 田中克之).....	208
大会観戦ガイド.....	210
陸協NEWS.....	212
事務局からのお知らせ.....	214

公告

「陸連時報」は公益財団法人日本陸上競技連盟定款第4条第6号の「機関誌」の性格を有するものですが、毎月「陸上競技マガジン」と一体として発行しています。陸上競技に関する啓発記事のほか、必要に応じて、評議員会、理事会の決定事項、各専門委員会、事務局からの報告、通達も掲載いたします。本時報に掲載した通達は、公式に通達したものと取扱わせていただきますので、登録競技者は本時報の掲載内容にご注意下さい。また、陸上競技指導者の方は、所属競技者にお知らせ下さるようお願い致します。

公益財団法人日本陸上競技連盟

仁川アジア大会を終えて

理事・強化委員長 原田 康弘

表1 第17回アジア競技大会(2014/仁川)日本代表陸上競技選手団

No.	役職	氏名	陸連役職	所属
1	監督	原田 康弘	理事・強化委員長	
2	ヘッドコーチ兼 中長距離・ロード統括	酒井 勝充	強化副委員長 中長距離・ ロード部門統括	コニカミノルタ
3	男子短距離コーチ	伊東 浩司	強化委員会 男子短距離部長	甲南大学
4	男子短距離コーチ	土江 寛裕	強化委員会 男子短距離部 副部長	東洋大学
5	女子短距離コーチ	瀧谷 賢司	強化委員会 女子短距離部長	大阪成蹊大学
6	男子中長距離・ マラソンコーチ	宗 猛	強化委員会 男子中長距離 マラソン部長	旭化成
7	男子中長距離・ マラソンコーチ	黒木 純	強化委員会 男子中長距離 マラソン部委員	三菱重工長崎
8	女子中長距離・ マラソンコーチ	武雷 豊	強化委員会 女子中長距離 マラソン部長	天満屋
9	ハードルコーチ	千葉 佳裕	強化委員会 ハードル部委員	城西大学
10	跳躍コーチ	吉田 孝久	強化委員会 跳躍部長	日本女子体育大学
11	跳躍コーチ	小林 史明	強化委員会 跳躍部委員	日本体育大学
12	投擲コーチ	栗山 佳也	強化委員会 投擲部長	大阪体育大学
13	混成コーチ	本田 陽	強化委員会 混成部長	中京大学
14	競歩コーチ	今村 文男	強化委員会 競歩部長	富士通
15	競歩コーチ	小坂 忠広	強化委員会 競歩部副部長	石川県立小松 特別支援学校
16	ドクター	鳥居 俊	医事委員会 委員	早稲田大学
17	トレーナー	村上 博之	医事委員会 トレーナー部 委員	マキユモ鍼灸 治療院
18	トレーナー	田村佑実保	医事委員会 トレーナー部 部員	Sokasta治療院
19	渉外	平野 了	事務局	

はじめに

第17回アジア競技大会が9月19日から10月4日まで韓国・仁川で開催された。陸上競技は大会後半の9月27日から6日間で行われ、男子19種目、女子16種目に出場する選手52名、および役員19名の合計73名で臨んだ。

今回のアジア大会では、リオデジャネイロオリンピック、北京世界選手権への起点として厳しい選考基準を設けた。また、2020年の東京オリンピックを見据えて強化育成部からの推薦競技者8名を優先的に選考することを選考要項に盛り込んだ。アジア大会はJOCから派遣される総合競技大会でもあり、日本選手団としての行動規範、選手村での生活、公式行事および服装などいろいろな制約があり、初めて代表になる選手にとっては戸惑いも多かったようである。しかし、これはオリンピックやユニバーシアード大会と同じである。したがって、このような経験は、2016年度に開催されるリオデジャネイロオリンピックに生かされるものと信じている。また、今回もマルチサポートハウスを設置していただき、選手のコンディショニングに大いに役立った。特に、食事に関しては十分活用でき最終コンディショニングに生かされた。アクセスも選手村からサポートハウスまでシャトルバスが20分おきに出て非常に効率よく運営されていた。

No.	男子種目	氏名	所属(登録陸協)
1	100m/4×100mリレー	山縣 亮太	慶應義塾大学(広島)
2	200m/4×100mリレー	飯塚 翔太	ミズノ(静岡)
3	200m/4×100mリレー	原 翔太	上武大学(群馬)
4	400m/4×400mリレー	金丸 祐三	大塚製薬(徳島)
5	400m/4×400mリレー	加藤 修也	早稲田大学(静岡)
6	4×100mリレー	高瀬 慧	富士通(千葉)
7	4×100mリレー/4×400mリレー	藤光 謙司	センリン(神奈川)
8	4×400mリレー	高平 慎士	富士通(千葉)
9	800m/4×400mリレー	川元 奨	日本大学(長野)
10	5000m/10000m	佐藤 悠基	日清食品グループ(東京)
11	5000m	村山 紘太	城西大学(宮城)
12	10000m	大迫 傑	日清食品グループ(東京)
13	マラソン	松村 康平	三菱重工長崎(長崎)
14	マラソン	川内 優輝	埼玉県庁(埼玉)
15	3000mSC	篠藤 淳	山陽特殊製鋼(兵庫)
16	110mH	増野 元太	国際武道大学(北海道)
17	400mH/4×400mリレー	岸本 鷹幸	富士通(東京)
18	走高跳	戸邊 直人	千葉陸協(千葉)
19	走高跳	衛藤 昂	筑波大学(三重)
20	棒高跳	山本 聖途	トヨタ自動車(愛知)
21	棒高跳	澤野 大地	富士通(千葉)
22	三段跳	山本 凌輝	順天堂大学(長崎)
23	やり投	新井 涼平	スズキ浜松AC(静岡)
24	やり投	村上 幸史	スズキ浜松AC(静岡)
25	十種競技	右代 啓祐	スズキ浜松AC(静岡)
26	十種競技	中村 明彦	スズキ浜松AC(静岡)
27	20km競歩	鈴木 雄介	富士通(千葉)
28	20km競歩	高橋 英輝	岩手大学(岩手)
29	50km競歩	谷井 孝行	自衛隊体育学校(埼玉)
30	50km競歩	山崎 勇喜	自衛隊体育学校(埼玉)

No.	女子種目	氏名	所属(登録陸協)
1	100m/200m/4×100mリレー	福島 千里	北海道ハイテクAC(北海道)
2	400m/4×400mリレー	松本奈菜子	浜松市立高校(静岡)
3	400m/4×400mリレー	青山 聖佳	松江商業高校(島根)
4	4×100mリレー/4×400mリレー	市川 華菜	ミズノ(愛知)
5	4×100mリレー	藤森 安奈	青山学院大学(東京)
6	4×400mリレー	千葉 麻美	東邦銀行(福島)
7	5000m	尾西 美咲	積水化学(千葉)
8	5000m	松崎 璃子	積水化学(千葉)
9	10000m	西原 加純	ヤマダ電機(群馬)
10	10000m	萩原 歩美	ユニクロ(東京)
11	マラソン	木崎 良子	ダイハツ(大阪)
12	マラソン	早川 英里	TOTO(東京)
13	3000mSC	三郷実沙希	スズキ浜松AC(静岡)
14	3000mSC	中村真悠子	筑波大学(茨城)
15	100mH/4×100mリレー	木村 文子	エディオン(広島)
16	100mH/4×100mリレー	青木 益未	環太平洋大学(岡山)
17	400mH/4×400mリレー	久保倉里美	新潟アルビレックスRC(新潟)
18	走高跳	福本 幸	甲南学園AC(兵庫)
19	棒高跳	我孫子智美	滋賀レイクスターズ(滋賀)
20	ハンマー投	綾 真澄	丸善工業(香川)
21	やり投	海老原有希	スズキ浜松AC(静岡)
22	20km競歩	井上 麗	天満屋(岡山)

た。一時的に選手村でのエレベーターがトラブルに見舞われたが、これも改善され、食事面についても問題はな

かった。

競技成績目標と現状

本大会の目標は「金メダル10個」であった。これは、2013年ランキングを基に日本選手の記録などから考慮し設定したものである。中東勢の国籍変更等の情報はつかんではいたが、目標値を下げることなく、厳しい数とは理解しながらもあえて課した。現実には、金メダル3、銀メダル12、銅メダル8という成績で、金メダル数が目標に届かなかったことは重く受け止める必要がある。しかし、近年の重要国際大会と比較して、多くの選手が自己記録やシーズンベストを更新したという点は評価できる。一方で、日本トップ選手がこれらの記録を出したとしてもアジアの頂点を取ることができなかったという点は、緊急に対策を要する課題であろう。この現実をしっかりと受け止め、今までの強化策を振り返り、今後、リオデジャネイロ、東京に向けて強化施策を再検討する。

競技結果

先述のとおり、今大会の陸上競技での目標設定は、金メダル10個であった。しかし、結果的には金メダル3、銀メダル12、銅メダル8であり、メダル総数では前回の広州アジア大会を上回ったものの、金メダル数としては、広州大会より1個少なく、目標値も大幅に下回った。アジアのライバル国（中東諸国）の選手情報も掴んではいたが、中国の予想以上の活躍に対応できなかった。特に、男子4×100mリレーや男子やり投、男子20km競歩などでの躍進は日本にとって危機的状況である。しかし、金メダルを獲得した3種目については、非常に価値のあるものであった。男子50km競歩で優勝した谷井孝行選手（自衛隊体育学校）は、前半から積極的なレースで日本記録に迫る勢いで大会新記録を樹立した。記録的にもワールドクラスのタイムだけに来年の北京世界選手権、リオデジャネイロオリンピックに大いに活躍が期待できる。

また、今シーズン春から日本記録を連発している十種競技の右代啓祐選手（スズキ浜松AC）が国際大会で8000点を超えて優勝したことも世界で戦える実力が備わっている証しといえる。さらに、男子4×400mリレー（金丸祐三選手（大塚製薬）・藤光謙司選手（ゼンリン）・飯塚翔太選手（ミズノ）・加藤修也選手（早稲田大学））は、4×100mリレーの屈辱を晴らすかの如く、各走者とも前半から積極的なレースで主導権を握り、見事に優勝した。これは、個人の専門種目の枠にとらわれず、男子短距離ナショナルチームが一体となった結果であったと言える。また、男子同様に女子4×400mリレーの活躍も若手とベテランが上手く噛み合い、日本記録更新も期待できるレース内容であった。

また、12個の銀メダルの中でも、価値のあるメダルが多かった。たとえば、女子100mの福島千里選手（北海道ハイテクAC）は金メダルまで100分の1秒であったし、男子マラソンの松村康平選手（三菱重工長崎）も勝負はトラックまでもつれ、金メダルまであと1秒であった。さらに、女子マラソンの木崎良子選手（ダイハツ）も最後までデットヒートを展開、男子400mハードルの岸本鷹幸選手（富士通）も非常に良いレースをした。このほかにも、男子棒高跳の澤野大地選手（富士通）のしぶとい跳躍での銀メダル獲得、男子リレーにおいては高平慎士選手（富士通）、藤光選手の活躍、久保倉里美選手（新潟アルビレックスRC）の執念ともいえる銀メダル獲得など、前回大会で苦い経験をした選手がしっかりと実力を発揮して銀メダルを獲得したことも収穫といえる。

さらに、強化育成部の推薦競技者で代表になった女子400mの青山聖佳選手（松江商業高校）、男子5000mに出場した村山紘太選手（城西大学）は自己記録を更新した。男子400mの加藤選手は自己記録に迫る勢いで決勝に進出し、男子三段跳では山本凌雅選手（順天堂大学）も決勝でベスト8に残りしっかりと勝負していた。大舞台で臆さずに試合ができ、活躍できたことは今後の競技人生において重要な経験であり、今後、日本の中核として活躍を期待している。

一方、強化指定選手で期待されていた男子棒高跳の山本聖途選手（トヨタ自動車）が記録なしであったことや、50km競歩の山崎勇喜選手（自衛隊体育学校）が失格であったことは、彼らは日本中が活躍を期待している選手だけに、この失敗を糧にリオでの活躍を目指してほしい。

最後に

今大会で、レース後に何人かの選手が脚に違和感を覚え、鳥居俊ドクターの診察を受けて、医学的見地からその選手が走れるか走れないかを診察していただいた。ドクター、監督、担当コーチの方々と話し、お互いに現状を把握して決断できたことは、非常に良かったと感じている。選手のコンディショニングについても、大会前からコンディショニングデータシステムを活用して状態、状況把握していくことをこれからも続けていかなければならない。

また、マルチサポートハウスでの食事面をサポートして選手のコンディショニングに大いに貢献していただいた栄養士の長坂聡子さんにもこの場を借りて感謝したい。今後、強化、科学、医学の連携をより深く持つていくことが、北京世界選手権、リオデジャネイロオリンピックに向けて重要であることを再認識した。

最後に、今大会の派遣にご協力いただいた役員の方々に、深くお礼を申し上げる。

表2 第17回アジア競技大会(2014/仁川)の日本選手成績 期日:2014年9月27日~10月3日

■該当ラウンドはありません

男子	氏名	所属	自己ベスト	日付	予選	日付	準決勝	日付	決勝			
100m	高瀬 慧	富士通	10.13	9/27	10.21 +0.1 (1着/3組) 準決勝進出	9/28	10.13 +0.2 (2着/2組) 決勝進出 PB	9/28	10.15 +0.4 銅メダル			
100m	山縣 亮太	慶應義塾大学	10.07	9/27	10.21 -0.1 (1着/1組) 準決勝進出	9/28	10.17 +1.2 (1着/1組) 決勝進出	9/28	10.26 +0.4 6位入賞			
200m	飯塚 翔太	ミスノ	20.21	9/30	20.94 +1.2 (1着/4組) 準決勝進出	10/1	21.26 0.0 (1着/1組) 決勝進出	10/1	20.87 +0.3 4位入賞			
200m	原 翔太	上武大学	20.41	9/30	20.76 +0.2 (1着/1組) 準決勝進出	10/1	21.25 0.0 (2着/3組) 決勝進出	10/1	20.89 +0.3 5位入賞			
400m	全丸 祐三	大塚製薬	45.16	9/27	46.68 (1着/1組) 準決勝進出	9/27	45.72 (2着/1組) 決勝進出	9/28	46.04 4位入賞			
400m	加藤 修也	早稲田大学	45.69	9/27	46.72 (2着/4組) 準決勝進出	9/27	45.88 (2着/2組) 決勝進出 SB	9/28	46.13 5位入賞			
800m	川元 爽	日本大学	1:45.75	9/30	1:53.24 (4着/3組)	10/1		10/1				
5000m	村山 純太	城西大学	13:38.87					9/27	13:34.57 5位入賞 PB			
5000m	佐藤 悠基	日清食品グループ	13:13.60					9/27	13:34.97 6位入賞 SB			
10000m	大迫 傑	日清食品グループ	27:38.31					10/2	28.11.94 銀メダル SB			
10000m	佐藤 悠基	日清食品グループ	27:38.25					10/2	欠場			
3000mSC	篠藤 淳	山陽特殊製鋼	8:32.89					9/29	8:41.37 4位入賞			
110mH	増野 元太	国際武道大学	13.58	9/28	13.74 +1.0 (2着/1組) 決勝進出	9/30		9/30	13.66 +0.4 4位入賞			
400mH	岸本 鷹幸	富士通	48.41	9/30	50.27 (3着/3組) 決勝進出			10/1	49.81 銀メダル			
走高跳	戸邊 直人	千葉陸協	2m31					9/29	2m25 5位入賞			
走高跳	衛藤 昂	筑波大学	2m28					9/29	2m15 11位			
棒高跳	澤野 大地	富士通	5m83					9/28	5m55 銀メダル			
棒高跳	山本 聖途	トヨタ自動車	5m75					9/28	記録なし			
三段跳	山本 凌雅	順天堂大学	16m10					10/2	15m70 8位入賞			
やり投	新井 涼平	スズキ浜松AC	85m48					10/2	84m42 銀メダル			
やり投	村上 幸史	スズキ浜松AC	85m96					10/2	81m66 4位入賞 SB			
20km競歩	鈴木 雄介	富士通	1:18:17					9/28	1:20.44 銀メダル			
20km競歩	高橋 英輝	岩手大学	1:18:41					9/28	1:24.04 7位入賞			
50km競歩	谷井 孝行	自衛隊体育学校	3:41:32					10/1	3:40:19 金メダル GR PB			
50km競歩	山崎 勇善	自衛隊体育学校	3:40:12					10/1	失格			
マラソン	松村 康平	三菱重工長崎	2:08.09					10/3	2:12:39 銀メダル			
マラソン	川内 優輝	埼玉県庁	2:08:14					10/3	2:12:42 銅メダル			
十種競技	右代 啓祐	スズキ浜松AC	8308	9/30	100m	11.10 +2.1 (838)	9/30	400m	50.25 (803)	10/1	やり投	68m09 (860)
				9/30	走幅跳	7m08 -0.6 (833)	10/1	110mH	15.16+0.2 (830)	10/1	1500m	4:43.76 (657)
				9/30	砲丸投	14m80 (777)	10/1	円盤投	48m98 (849)	トータル	8088 金メダル	
				9/30	走高跳	2m02 (822)	10/1	棒高跳	4m70 (819)			
十種競技	中村 明彦	スズキ浜松AC	8035	9/30	100m	10.66 +1.7 (938)	9/30	400m	48.19 (900)	10/1	やり投	52m05 (619)
				9/30	走幅跳	7m36 +1.3 (900)	10/1	110mH	14.33+1.9 (932)	10/1	1500m	4:16.53 (835)
				9/30	砲丸投	11m75 (591)	10/1	円盤投	34m75 (559)	トータル	7828 銅メダル	
				9/30	走高跳	1m99 (794)	10/1	棒高跳	4m50 (760)			
4×100mリレー	予選期日	出場オーダー				順位				記録		
	9月29日	山縣-飯塚-高平-原				1着 決勝進出				39.18		
	決勝期日	出場オーダー				順位				記録		
4×400mリレー	10月2日	山縣-飯塚-高平-高瀬				銀メダル				38.49		
	予選期日	出場オーダー				順位				記録		
	9月29日	加藤-藤光-高平-全丸				1着 決勝進出				3:05.53		
	決勝期日	出場オーダー				順位				記録		
10月2日	全丸-藤光-飯塚-加藤				金メダル				3:01.88 SB			
女子	氏名	所属	自己ベスト	日付	予選	日付	準決勝	日付	決勝			
100m	福島 千里	北海道ハイテクAC	11.21	9/27	11.49 -0.3 (1着/1組) 決勝進出			9/28	11.49 -0.5 銀メダル			
200m	福島 千里	北海道ハイテクAC	22.89	9/30	23.35 +1.2 (1着/2組) 決勝進出 SB			10/1	23.45 0.0 銅メダル			
400m	松本奈菜子	浜松市立高校	53.59	9/27	53.65 (4着/3組)			9/28				
400m	青山 聖佳	松江商業高校	53.40	9/27	52.99 (3着/2組) 決勝進出 PB			9/28	53.20 5位入賞			
5000m	松崎 璃子	積水化学	15:22.67					10/2	15:18.95 5位入賞 PB			
5000m	尾西 美咲	積水化学	15:21.73					10/2	15:37.60 7位入賞			
10000m	萩原 歩美	ユニクロ	31:45.29					9/27	31:55.67 銅メダル			
10000m	西原 加純	ヤマダ電機	31:53.69					9/27	32:41.49 8位入賞			
3000mSC	三郷実沙希	スズキ浜松AC	9:49.85					9/27	9:52.26 6位入賞			
3000mSC	中村真悠子	筑波大学	9:53.87					9/27	10:08.67 7位入賞			
100mH	木村 文子	エディオン	13.03	9/30	13.47 +0.7 (2着/2組) 決勝進出			10/1	13.25 0.0 銅メダル			
100mH	青木 益未	環太平洋大学	13.36	9/30	13.76 +0.7 (4着/1組)			10/1				
400mH	久保倉里美	新潟アルビレックスRC	55.34	9/30	58.46 (2着/2組) 決勝進出			10/1	56.21 銀メダル SB			
走高跳	福本 幸	甲南学園AC	1m92					10/2	1m80 9位			
棒高跳	我孫子智美	滋賀レイクスターズ	4m40					9/30	4m25 銀メダル SB			
ハンマー投	綾 真澄	丸善工業	67m26					9/28	59m84 銅メダル			
やり投	海老原有希	スズキ浜松AC	62m83					10/1	58m72 4位入賞 SB			
20km競歩	井上 麗	天満屋	1:31:48					9/28	1:36:21 5位入賞			
マラソン	木崎 良子	ダイハツ	2:23.34					10/2	2:25.50 銀メダル			
マラソン	早川 英里	TOTO	2:25:31					10/2	2:33:14 4位入賞			
4×100mリレー	予選期日	出場オーダー				順位				記録		
	決勝期日	出場オーダー				順位				記録		
	10月2日	藤森-市川-青木-福島				銅メダル				44.05		
4×400mリレー	予選期日	出場オーダー				順位				記録		
	決勝期日	出場オーダー				順位				記録		
	10月2日	青山-松本-市川-千葉				銀メダル				3:30.80 SB		

第17回アジア競技大会(2014/仁川)各ブロック報告

強化委員会

男子短距離ブロック

伊東浩司

男子短距離ブロックは、今大会において、100mに桐生祥秀選手(東洋大学)・山縣亮太選手(慶應義塾大学)、200mに原翔太選手(上武大学)・飯塚翔太選手(ミズノ)、400mに金丸祐三選手(大塚製薬)・加藤修也選手(早稲田大学)、リレーメンバーとして高瀬慧選手(富士通)・藤光謙司選手(ゼンリン)・渡邊和也選手(チームミズノアスレティック)をエントリーした。しかし、8月上旬、リレーメンバーである渡邊選手の故障・代表辞退により、高平慎士選手(富士通)を急遽代表へ追加した。さらに、世界ジュニア選手権で活躍した桐生選手が9月の日本インカレにおいて、大腿部を故障し、代表辞退となってしまった。大会直前の辞退ということもあり、100mにエントリー変更の模索、リレー種目においては、大きな変更を余儀なくされる状況であった。

大会本番では、直前に開催されたコンチネンタルカップに出場していたカタールやサウジアラビア、中国選手などの順当な勝利という結果になってしまった。100mには山縣選手に加えて、直前に高瀬選手のエントリーが可能となり出場することとなった。予選、準決勝から山縣選手、高瀬選手ともにレースをリードする好走を見せていたが、カタールのオグノデが世界トップレベルの走りを見せていた。決勝ではオグノデが中盤以降大きく引き離し、アジア記録を大きく上回る9秒93で優勝、2位に中国の蘇、3位に高瀬選手という結果であった。山縣選手は準決勝直後からコンディションに不安を抱え、その状況がレースに出てしまい6位という順位であった。

200mについては、飯塚選手が20秒87で4位、原選手が20秒89で5位であった。飯塚選手は20秒21の自己ベストを持ち、メダルを期待されたが、持ち味を上手く出すことが出来ず、改めて決勝ラウンドまでの進み方に課題が浮き彫りになった。一方、5位に入賞した原選手は今回が初めての国際大会であったことを考えると、今後につながるレースだったと考える。優勝は20秒14の好タイムでカタールのオグノデが100mと合わせて2冠を達成した。

400mは金丸選手が46秒04で4位、加藤選手が46秒13で5位であった。優勝はサウジアラビアのマスラヒで、44秒46という世界のメダルレベルの凄いタイムであった。

個人種目を踏まえ、リレーは男子短距離の総力戦で臨んだ。4×100mリレーは、予選は100mで脚に違和感を覚えた高瀬選手をドクターの判断などで回復にあて、山縣-飯塚-高平-原のオーダーで39秒18の1着通過、4×400mリレーの予選は加藤-藤光-高平-金丸のオーダーで、1着通過した。両レース競技時間間隔が1時間に満たない中で、最年長でオリンピック銅メダリストの高平選手が両方をこなしてくれ、決勝へ繋がる大きな役割を果たした。

中国との一騎打ちと想定していた4×100mリレー決勝では、予選のオーダーのアンカー原選手から高瀬選手に代え、山縣-飯塚-高平-高瀬で臨んだ。結果は中国に圧倒的な差をつけられ銀メダルに終わった。中国は日本が目指していた37秒台(37秒99)のアジア新をマークして優勝した。金メダルを最低の目標としていた種目だけに悔しさは残るが、来年以降に向けて技術面も含め、再考するきっかけになると考え

る一方で4×400mリレー決勝は、選手主体でオーダーを決め、金丸-藤光-飯塚-加藤のオーダーで臨んだ。金丸選手、藤光選手が好走し、20mの差をつけて飯塚選手につないだ。飯塚選手は4×100mリレーの決勝からわずか35分後のレースであったにも関わらず、後続を寄せ付けずアンカーの加藤選手につないだ。加藤選手は追ってくる400mチャンピオンのマスラヒを寄せ付けず、1位でゴールした。3分01秒88のタイムもここ数年の結果から考えると好タイムだと評価できる。また、今回好走した藤光選手と飯塚選手は200mを専門とする選手であり、4×400mリレーではスピードを生かしたレース展開が有効であることが再度確認され、今後の戦略のための大きな経験となったと考える。代表選手が2名辞退するという状況の中、JOC・陸連事務局など関係する方々のご尽力により、当初予定していた出場種目・リレーオーダーの変更をすることが出来、その環境の中、選手全員・スタッフ・パーソナルコーチなどの総力戦で対応できたことは、ナショナルリレーチームの意義を知ることが出来、非常に大きな大会となった。

女子短距離ブロック

瀧谷賢司

まず、初めに、女子短距離チームとして、銀2、銅2個を獲得する事が出来た。関係して頂いた各方面の方々に感謝とお礼を申し上げる。

100m、200mには、福島千里選手(北海道ハイテクAC)が出場し、両種目ともに予選は久しぶりに福島選手らしい走りを見せてくれた。100m、200mともに、予選11秒49(1着)23秒35(1着)で、スタートからの流れも良く、走り急ぐ事も無くつながりの良いレースであった。しかし、決勝では、前回金メダリストの意識が強く出たのか、少し力みの感じるレースで、100mで銀メダル(11秒49)、200mで銅メダル(23秒45)に終わった。本人のコメントの通り、今まではレースの「パーツごと」に手応えを感じていたレースから、本来のつながりのあるレースに変化し、復帰戦となった今回のレースは、次の北京世界選手権、リオデジャネイロオリンピックのステージに希望が持てる再スタートになった。今後は、心身共に容量の大きい選手に成長し、真の女子短距離界のリーダーになってもらいたい。

400mには、青山聖佳選手(松江商業高校)、松本奈菜子選手(浜松市立高校)の高校生コンビが出場した。青山選手は、自己新記録の52秒99(3着)で予選を通過し、決勝では53秒20で5位に入賞した。前半の積極的なレースは、今までの日本人選手にはない魅力で、世界で通用出来る可能性(50秒台)を感じさせるシニア代表初レースであった。一方、今後の課題は、200mのレベルアップであろう。400mに偏ること無く、スプリント種目全てに対応出来る選手を目指してもらいたい。また、松本選手も予選で自己記録に近い53秒65(4着)の走りを見せてくれた。惜しくも決勝進出はならなかったが、高校生とは思えない落ち着いたレースで感心させられた。今後の課題は、持ち味のスピード持久力を生かす為にも、ショートスプリント力の向上に期待したい。

両選手とも、ジュニアの選手でありながら新鮮で積極的な

レースが出来た事は、リオデジャネイロオリンピックさらには東京オリンピックにつながる明るいニュースであったといえる。

4×100mリレーは、藤森安奈選手（青山学院大学）－市川華菜選手（ミズノ）－青木益未選手（環太平洋大学）－福島選手のオーダーで臨んだ。当初予定していたメンバーから若手のエース土井杏南選手（大東文化大学）を故障で外さなければならない状況であった為、バトンパスの精度が高まらなかったのは残念であったが、何とか44秒05で銅メダルを獲得出来た事は、次へのステップになるものと信じている。今後の課題としては、個々のスプリント能力の向上と、層の厚さを目指したい。

4×400mリレーは、青山選手－松本選手－市川選手－千葉麻美選手（東邦銀行）のオーダーで臨んだ。金メダルと日本記録更新を目標として決勝に臨んだが、惜しくも3分30秒80の銀メダルに終わった。各選手のラップは、青山選手が52秒5、松本選手が52秒4、市川選手が53秒4、千葉選手が52秒5（非公式）であった。このリレーにおいて28年振りのメダル獲得は、世界選手権やオリンピックへつながる光明であったと信じている。

両リレーともに、来年のワールドリレーズ（バハマ）が北京世界選手権およびリオデジャネイロオリンピックの出場権を獲得する大会である。したがって、ここで8位に入ることを目指してトレーニングに精進してもらいたい。なお、両リレーとも、ワールドリレーズにおいて入賞するためには日本記録の更新は必須であろう。現在の世界ランキングは、4×100mリレーが14位、4×400mリレーが17位であり、世界選手権出場権の当落線上にあるといえる。4×400mリレーでは3分28秒を切る事を目標に強化を進めていきたい。

今後の課題としては、全てのスプリント種目をこなせるマルチスプリンターを育成する事が挙げられる。また、各選手の間力向上、海外での経験、パーソナルコーチとの連携（意識や競技に関する価値観の共有）も課題であろう。

以上の課題点を基に、女子短距離チームは個々の自立した競技力、競技感の充実を目指し、2015世界選手権、2016オリンピックに向かいたい。

男子中長距離・マラソン

宗 猛

800m予選に、今季日本記録を更新した川元奨選手（日本大学）が出場した。7月に左脛を疲労骨折し、完治しない状態でのレースになり自己ベストより7秒49悪い記録で予選敗退した。現地での調整も故障箇所をかばっての走りになり、ウエイトオーバーも重なって最悪の状態だった。故障後のコンディションチェックが疎かになり、直前に状態を確認したが遅かった。JISSで状態チェックを行い、欠場の判断を早めに決める事が必要だと感じた。決勝で上位3人が失格になったこともあり、自己ベスト記録で走ればメダル獲得が可能だっただけに悔やまれる。

初日の9月27日に行われた5000mに、佐藤悠基選手（日清食品グループ）と村山紘太選手（城西大学）が出場した。レースはバーレーンとカタールとの勝負になり、二人とも集団の中で我慢の走りをした。4000mから徐々にペースが上がり村山選手が先に遅れたが、ホームストレートで先行する佐藤選手を交わして自己ベストで5位。佐藤選手が6位だった。佐藤選手は大会前の9月18日に38.7度の熱でダウンし、3日休んで練習を再開した。その後遺症からなのが右アキレス腱が

腫れて完全ではない状態だった。村山選手は大会直前の日本インカレで1500m今季日本ランキングトップをマーク、期待が持てたが4000mからのスピード変化に余裕がなくなり、得意のスピードが活かせなかった。上位4人がラスト1000mを2分26～28秒台で上がる世界のスピードを体感できたことを無駄にせず、今後のトレーニング、レースに活かして欲しい。

10000mは右アキレス腱周囲炎で佐藤選手が欠場し、大迫傑選手（日清食品グループ）のみの出場となった。9月上旬のヨーロッパ遠征で3000mの日本記録を更新して上り調子の大迫選手は、集団の中で好位置をキープ、ゆさぶりに巧く対応した。バーレーンの2人との勝負になったが、8000m手前でバーレーンの選手が1人離れて一騎打ちとなった。大迫選手が9000mで積極的に勝負に出てスピードアップしたが、ラストスパート争いでエルアッパシに0秒74差で敗れ銀メダルだった。大迫選手はアメリカでのトレーニング成果で実力が上がったと感じる走りだった。佐藤選手は過去の世界大会同様にピーキングが巧いかずに不本意な結果だった。日本選手権で4連覇の実績があるので、同様のピーキングを本戦でも期待したい。

マラソンは陸上の最終日10月3日に行われ、順調に仕上がった川内優輝選手（埼玉県庁）と松村康平選手（三菱重工長崎）が出場した。肌寒いコンディションで記録も期待できたが、スローペースになり勝負のみのレースになった。25km以降に仕掛けると言っていた川内選手が27.5kmでスパートしてレースが動き出した。30kmの給水でバーレーンのマフブーブと接触した川内選手が離れるが粘って集団に戻った。終始余裕のあった松村選手が集団の前に出て引張るが自信が無いのか行ききれない。40km過ぎにモンゴルのバトオチルが遅れ、3人になった。勝負はトラックに持ち越され、バックストレートで川内選手が遅れ、ホームストレートでマフブーブが逃げ1秒差で松村選手が銀メダル、4秒差で川内選手が銅メダルだった。余裕のあった松村選手がマフブーブが離れかかった35km過ぎに、ロングスパートができれば独走の可能性があっただけに勿体ないレースだった。この経験を次に活かして欲しい。川内選手は過去の大邱、モスクワ世界選手権に比べると力を出したレースだった。これからも場数を踏んで進化し続けることを期待したい。

3000mSCに篠藤淳選手（山陽特殊製鋼）が出場した。銅メダルを目標にスタートした。レースは優勝したカタールのカマルが飛び出し独走。篠藤選手は第2グループでレースを進めた。走力を技術でカバーし3人による最終ハードルまで銀メダル争いをしたが、ラストスパートで敗れ4位だった。5000mの走力を上げることが課題だと感じた。

女子中長距離・マラソン

武富 豊

女子長距離マラソン種目には中東代表からは世界トップクラスの選手が出場する厳しい戦いになる事を予想し、各種目とも積極的なレースメイクを行い取りこぼしの少ない戦いを目標に臨む事を確認する為、長距離ブロックでは事前に代表選手の強化合宿を実施し、今大会に臨んだ。3000mSCには三郷実沙希選手（スズキ浜松AC）、中村真悠子選手（筑波大学）が出場、三郷選手はスタート直後から積極的に前でのレース展開を試みたが、後半のペースアップに対応出来ず6位、中村選手は経験不足からスタートから後方での苦しい走りになり、最後の1000mで大きく崩れ7位に終わった。10000mに

は萩原歩美選手（ユニクロ）、西原加純選手（ヤマダ電機）が出場、スタート直後から超スローペースで入ったが、1000mを過ぎると丁（中国）が前に出て、日本選手が想定していたレースペースにスピードアップ、素早く反応した萩原選手は2番手をキープしたが、好調と聞いていた西原選手が、後手に回ってしまい、4000m過ぎで遅れてしまった。8000m過ぎからはさらにペースが上がり、優勝したモハメド（アラブ首長国連邦）、丁と萩原選手の争いとなった。最後はスピードの差で3位だったが、後半の5000mを15分40秒を切るペースアップに対応し入賞を果たした事は評価出来る。西原選手は、力を発揮出来ず8位に終わった。5000mには積水化学の尾西美咲選手、松崎璃子選手の2名が出場、この種目にはバーレーン・アラブ首長国連邦・中国など有力選手が多く出場し苦戦が予想されたが、積極的なレースメイクをする事を課題にスタート直後から2名で先頭に立ち流れを作った。後半のスピード変化に対応出来ず松崎選手5位、尾西選手7位と言う結果だったが、積極的にレースを作って残り600mまで先頭で走り、今季日本人1位の記録（自己新）を出した松崎選手の走りは評価できる。

金メダルを期待したマラソンでは、木崎良子選手（ダイハツ）、早川英里選手（TOTO）が出場。予想通り、スタート直後にスローペースになってしまったが、10km手前の急激なスピードアップにも慌てず木崎選手は対応し、15kmからはキルワ（バーレーン）とのマッチレースに持ち込み、何度も振り切ろうと試みた。しかし、38km手前のスパートに対応出来ず40kmでは22秒まで開いた差を最後は13秒差まで縮めたが力及ばず2位に終わったが、ロンドンオリンピック・モスクワ世界選手権では簡単にトップ争いから脱落した戦いから、今回は何度も勝負に出たレースぶりなど着実に走力が着いてきた事を印象付けた。初めての代表経験となった早川選手は緊張から最初のペースアップに対応出来ず、前半で大きく遅れたが、後半粘って追い上げ3位と1秒差の4位と健闘した。

今大会では、ケニアやエチオピアから帰化した中東勢が増える中、全体的には健闘したが、アジア大会でも長距離種目での実力差は大きく、金メダルを狙うには、オリンピックや世界選手権等でメダル争いを出来る実力を養成する必要性を感じる。

ハードルブロック 谷川 聡

仁川アジア大会のハードル種目には男子110mH 1名、400mHで1名、女子100mHで2名、女子400mHで1名の計5名の選手が出場を果たした。5名中3名が代表経験者、他2名が学生という布陣で臨んだ。

本番直前にハードル合宿を行う予定であったがモロッコで行われたコンチネンタルカップと重なった為、合宿は行わず各専任コーチの方々にも最終調整をお願いした。現地入りしてからの練習では、岸本鷹幸選手（富士通）が座骨神経痛の痛みがあることから、刺激練習ができなかったが他の4名は怪我もなく最終刺激ができた。

最初のハードル種目として男子110mHが行われ、増野元太選手（国際武道大学）が出場した。増野選手は初出場とは思わせない冷静なレース展開で決勝に進出した。決勝では課題であったスタートを決め順調な出だしであったが、後半隣の選手との接触もあり順位を下げてしまった。結果は13秒66の4位と残念ながらメダルには届かなかったが、初出場として

は健闘したといえる。男子110mHの日本のレベルは全体的にペースアップをしてきているように思うがアジアからは少し離され始めている。もう1段階全体的なペースアップをして北京世界選手権、リオデジャネイロオリンピックにつなげる必要があるだろう。

女子100mHでは木村文子選手（エディオン）、青木益未選手（環太平洋大学）の2名が出場した。青木選手は練習時からスプリントが好調でだいぶ動いていた。その為か1台目の踏み切りが合わない感じがあったものの、試合前アップではしっかりと修正し試合に臨んだ。結果は意気込みあまりスタート二歩目でバランスを崩してしまった。そこから立て直し後半追い上げたものの、13秒76でわずかに届かず予選敗退という結果であった。木村選手は練習時から安定感のある踏み切りをしており、予選は余裕を持って通過した。決勝では12秒台を目標にし、ピッチアップを心がけた。自己ベストまではいかなかったものの、韓国選手に競り勝ちシーズンベストの13秒25で銅メダルを獲得した。女子100mHではスピードの青木選手と技術の木村選手という印象を感じた。今後世界で戦う為には最大筋力の向上や短距離との合同練習及び味の素ナショナルトレーニングセンターなどでのスキルチェック等が必要であると感じた。

男子400mHでは岸本鷹幸選手（富士通）が出場した。座骨神経痛の影響もあり予選は脚のチェックをしながら走った。予選ではあまりにもリズムが悪かった為、決勝では前半のリズムを特に意識し臨んだ。結果としては49秒81で、10台目を跳び終えたあとに若手のバーレーンの選手に競り負けてしまった。故障の影響による計画的なトレーニングが積みきれなかったのだろう。男子400mHは日本のお家芸であり、岸本選手の自己記録であれば世界でも決勝に近い種目である。ロンドンオリンピックでの怪我以来、脚に不安を抱えた状態が続いており思うように結果を出せていない。トレーニングについてももう一度見直しが必要であると感じた。

女子400mHにはベテランの久保倉里美選手（新潟アルビレックスRC）が出場した。夏からスプリント動作のタイミングがズレ始めなかなか思うように進まず、予選でも納得のいく走りができていなかった。決勝では不安はあったものの、過去の経験値からリズムでカバーできるよう修正を図った。ライバルであるバーレーンの選手の脚が合わない隙に最後の直線では横に並び、相手にプレッシャーをかけた。10台目ではブレーキングのないハードリングの差で勝機があったが、スプリント力で逆転をされて56秒21の銀メダルとなった。女子の400mHもスピードのある選手が育ってきているがレース展開という部分では、まだまだ計画的なトレーニングが必要である。今後、久保倉選手の経験値を育ち行く選手に傳承し女子400mHも継続して世界で活躍できるよう足がかりをつくりたい。

今大会ではハードル種目でメダル3つを獲得できたが、目標としていた金メダルが0に終わったことは今後の強化を進める上で反省材料とした。来年度の世界選手権と2016年のオリンピックで戦えるレベルに到達するために必要となる海外での経験値、若手競技者の育成など課題はある。今回の結果をしっかりと受け止めて来年度に生かしていきたい。

跳躍ブロック 吉田孝久・小林史明

アジア大会における跳躍ブロックの目標は、金メダルを含

むメダル2つを獲得することであった。参加した多くの選手がアジアランキングで上位にいたので目標は十分に到達可能であると思われた。

大会に向けた取り組みとしては、9月13日に味の素ナショナルトレーニングセンターで選手とスタッフ、専任コーチを踏まえたミーティングを実施し、陸上競技の選手団全体ならびに跳躍ブロックの目標を確認した。翌14日の結団式を挟み19日までは事前合宿として味の素NTCで本場に向けた調整を行った。

仁川には23日に入った。当初、走高跳や三段跳で予選が実施される予定であったが、テクニカルミーティングでそれも変更となった。タイムテーブルやバーの高さの変更などはアジアの大会ではよくあることだが、勝負や記録を狙っている場合は調整が難しくなる。できるだけ予定どおりに実施してもらいたいと感じた。

跳躍種目の第1種目は金メダルの期待もかかる男子棒高跳からとなった。これには昨年のモスクワ世界選手権代表の山本聖途選手(トヨタ自動車)と澤野大地選手(富士通)が出場した。練習を見ている限り山本選手は非常に好調であった。しかし、試合が始まると調子が良いことが逆に悪い方に影響してしまい、記録なしという残念な結果に終わってしまった。一方、ベテランの澤野選手は、練習では助走の走りが噛み合わず苦戦していたが、跳躍を重ねるごとに改善され、勝負どころの5m55を1回目にクリアして銀メダルを獲得した。金メダルをかけた5m65は惜しくもバーを超えることができなかったが、練習の状態からみるとよく立て直したともいえ、ベテランらしい試合運びで及第点を与えられる内容であった。

続く種目はメダル獲得と日本記録更新の期待がかかる男子走高跳で、これには戸邊真人選手(千葉陸協)と衛藤昂選手(筑波大学)が出場した。この種目には今季世界最高の記録を持つバルシム(カタル)が出場するので優勝するのは正直厳しいところがあったが、二人とも今年に入って自己記録を更新していたこともあり、メダル獲得は十分に可能であると思われた。しかし、戸邊選手が2m25で5位、衛藤選手が2m15で11位という結果に終わってしまった。練習跳躍ではそれぞれ2m15と2m20をかなりの余裕をもってクリアしていたことから2m30は間違いないと思われたが、今になって考えると練習で力を出しすぎってしまったようにも感じる。もう少しコントロールさせて本番に温存させておいた方が良かったのかもしれない。この悔しい思いを忘れずに次につなげて欲しい。

翌30日には女子棒高跳が行われ、これには前回3位に入賞している我孫子智美選手(滋賀レイクスターズ)が出場した。心配された腰の具合も回復し、練習跳躍から好調のように感じられた。予定していた高さを順調にクリアし、今季ベストとなる4m25も2回目にクリアして前回は上回る銀メダルを獲得した。

一般種目の最終日となる10月2日には跳躍2種目が行われ、女子走高跳には2大会ぶりの出場となる福本幸選手(甲南学園AC)が出場した。福本選手は大会直前の腰痛も完治し良い状態で試合に臨むことができた。1m80までは順調にクリアできたがシーズンベストとなる1m85は惜しくもクリアできず9位という成績で競技を終了した。また、同日行われた男子三段跳には山本凌雅選手(順天堂大学)が出場した。ランキング的には厳しい戦いになることが予想されたが、気温が低い難しいコンディションの中、15m70で8位入賞を果たし

た。

跳躍全体の感想としては、メダル2つを獲得することができたが金メダルは獲得することはできなかった。アジアといえども中国の跳躍陣のレベルは高く、さらにバルシムのような選手もいることから簡単には勝てなくなってきている。だが、アジアで勝負できなければ世界で戦うことも難しい。これからも多くの国際大会に出場し、経験値を高めるとともに国際試合で勝負できる地力をつけていって欲しい。

また、今大会はメダル獲得を目指すものと東京オリンピックを見据えて経験させることを目的に選ばれた選手がいた。跳躍では山本凌雅選手がこれに該当するが、こうした総合大会に今の段階で参加できたことは非常に大きな経験になったと思われる。こうした機会を与えてくれた関係者の方々に感謝するとともに今後もこうした枠をさらに広げていただき、東京オリンピックに向けて若手選手とベテランが一丸となった強化を推進していければと考えている。

投擲ブロック

栗山佳也

〈女子ハンマー投 決勝(9月28日)〉

代表選手として綾真澄選手(丸善工業)が出場した。大会二日目の9月28日に決勝が行われ、結果は59m84の4位であった。しかし、後に大会本部からの発表で中国選手のドーピング違反により3位に繰り上がった。大会前の本人の目標記録は65m以上としていたが、ターンの乱れが予想以上に出て全く納得のいかない試合展開となった。練習場のサークルはこの大会のために急遽作られたもので、各国のコーチ陣からクレームがつくほど状態が悪く運営面での不備が随所に目立った。最終調整の段階での不安材料となったのは確かである。

決勝の第1投目は、ターンの入りで上体が思った以上に突っ込んだ状態になり、投げの後半では十分に振り切れる姿勢にはならなかった。2投目も同様で動作の修正ができない投げとなった。3投目は何とか記録を残したが、全くフィニッシュのタイミングが取れないままの前半となった。出場者が8人であったのでベスト8には自動的に進んだ。5投目は今回では最も良いと思われる動きではあったが、左ネットに引かける投げでファウルであった。最後の6投目に全力で臨んだが、僅かに右ネットにさわり記録を伸ばすことができなかった。今までのほとんどの試合ではどこかで動作の修正ができていたが、今回のこれほどまでに調子が出せない綾選手を見たことがなかった。大会前のランキングでは中国の2選手が飛び抜けており優勝は難しいが、経験的にはベテランの域に達した選手であるだけに記録の面では納得のいかない試合であった。

前述したが、中国選手が世界ランキング3位から4位ぐらいの77mを超える投擲を見せたが、ドーピング違反であることがわかり失格となった。このようなことも含めても、アジアで金メダルを取るためには75m以上でなければならず、一刻も早く綾選手に追いつき、日本記録を塗り替えることができる若手選手の出現が待たれるわけだが、今年度の国内試合での結果を見ると、綾選手以外で60m以上は3名であるが、やっと60mを超えた状態である。インターハイや国体で正式種目にし、底辺拡充を図らないと現状打破は厳しいと思われる。

〈女子やり投 決勝(10月1日)〉

代表選手として、海老原有希選手(スズキ浜松AC)が出場した。海老原選手は今大会で3回目のアジア大会となり前

回の広州大会で金メダルを獲得していた。ライバルは中国の2選手で、63m以上で自己記録を投げれば2連覇の可能性があるとされていて、今大会の金メダル有力候補として挙げられていた。今季前半は足首の故障など怪我に見舞われ、思うようなシーズンをおくれていなかったが、ようやくそれが回復して間に合った。

現地入りし直前の練習でも好調であり、不安だった怪我も気にならない状態であった。普段通りの試合をすれば2位以上は確実であると思われた。練習投擲を見る限りにおいて目立った動きの悪さは見られなかったが、怪我を庇う動作で最後の支持脚の踏ん張りが甘く状態が突っ込む感じが見られ若干の修正が必要であると感じたので、岡田コーチはその点を本人に伝えることとした。うまく試合を展開するためには、第1投目を確実に60mに乗せることが必要であることは選手自身良くわかっているが、やはり独特の緊張もあり力みが入ってしまった。2投目、3投目は少しの修正があったが、まだタイミングが今一つ合っていないように感じた。前半の3投目までの最高は58m72でベスト8に進んだ。

海老原選手はスロースタートの傾向がある選手であり、後半には合わせられる力を持っているので後半の3投に期待した。その4投目ラストクロスから投げに移る際、右大腿ハムストリングに痙攣と肉離れの症状を起こし、その後の投げができる状態ではなかった。しかし、そのまま5投目、6投目も試技を続け、その状態でも58m台を投げたが前半の最高をさらに伸ばすには至らなかった。もしも痙攣を起こさずに後半の投げができていたら、最低でも60m以上は投げていると思われるだけに残念であった。

結果は中国選手が65m47(大会新)、2位も中国選手で過去の国際試合で常にライバルである李玲蔚が入り、3位インド選手、海老原選手は残念ながら4位となった。やはり女子ハンマー投と同様で、常に62mから63m台を投げないとアジアは勿論、世界大会でもベスト8には残れない状況である。幸い、日本の女子やり投は海老原選手をトップとしそれに続く選手が多くいて、リオデジャネイロから東京オリンピックに向けて次世代を担う若手選手の成長が期待される。今回まで世界的レベルに引き上げてくれた海老原選手にはもう少し頑張ってもらいたい。

〈男子やり投 決勝(10月2日)〉

今大会日本代表として、新井涼平選手(スズキ浜松AC)と村上幸史選手(スズキ浜松AC)が出場した。新井選手はアジア大会初出場となったが、今季前半から絶好調であり4月の織田記念85m、日本選手権81m、海外のグランプリ82mなどコンスタントに81m以上を投げている安定度抜群での今大会となった。一方、ベテランの村上選手は日本選手権前の右大腿部の故障によりトレーニング不足での出場となった。万全の状態ではなかったが数々の試合経験を活かしてくれることを信じて臨むこととなった。

1投目は両者ともまずまずのスタートで、新井選手は少し力んで80m台後半、村上選手は新井選手を上回る81m台半ばと上位入賞を確実にする投擲を行うことができた。故障回復直後の村上選手には1投目が勝負であることは明白であり、後半に逆転することは難しいことは本人が最も良く分かっていたと思われる。この投げはさすがに村上選手と思わせる投げであった。新井選手はその後さらに記録を伸ばし2位につ

けた。この時点で日本の2選手は2位、3位につけた。一方、中国の趙慶剛は83m、85mと絶好調で自己記録を超える投擲を見せた。新井選手も逃げ切りは許さないとばかりに自己2番目の記録84m42を投擲し奮起したが、趙が6投目に89m15のアジア新記録を投げ勝負有りとなった。この記録は今季世界の上位でもあり溝口和洋選手を持つ日本記録さえも上回る驚異的な記録が誕生した。結局、新井選手は2位、3位にはザイツェフ(ウズベキスタン)、4位村上選手となった。今回の試合を振り返ると、5位が81m61であり、確実に82m以上投げないとメダルの可能性はない時代に突入したことになる。女子やり投同様、村上選手、新井選手、ディーン元気選手(ミズノ)に続く男子やり投は若手が順調に育っており、6年後の東京オリンピックに向けてさらに期待が膨らむものである。〈最後に〉

仁川アジア大会を振り返ると投擲種目では4名の出場となった。男女やり投で連覇を狙ったの大会であったが、銀1、銅1、4位が2つの成績であった。中国、インド、中東などアジアのレベルも着実に上がっており、金メダルはおろか3位入賞も厳しい時代に突入したと言える。現実的には、男女やり投以外のメダルは厳しいのは確かで、抜本的な強化対策の見直しを含めた組織作りとタレント発掘が急務である。

混成ブロック

本田 陽

春先の陸連時報において、リオデジャネイロオリンピックまでの長期計画の一環として今シーズンの混成ブロックの目標は、1) 海外の大会における8000点突破と、2) 右代啓祐選手(スズキ浜松AC)に次ぐ8000点選手の輩出を上げていたが、アジア大会の結果も含めそれらの目標は達成できた。

本大会では目標通り右代選手が8088点で金メダル、中村明彦選手(スズキ浜松AC)が7828点で銅メダルを獲得した。右代選手は海外の大会で初めて8000点を突破する好記録で、中村選手も6月の日本選手権混成で初めて8000点オーバーをマークしたベスト記録に次ぐセカンドベスト記録であり、今シーズンの最大目標としていた今大会にピークを合わせられたことは非常に重要である。

今大会の事前予想としては、アジア記録(8725点)を持つカザフスタンのカルポフ(2004年アテネオリンピック銅メダル)の調子如何で右代選手との金メダル争いになること、複数のメダル獲得のためにはウズベキスタンのアンドレーエフ(2013年アジア選手権3位、自己ベスト記録7879点)との争いになることなどがあげられたが、いずれにしても8000点またはそれ以上の記録が金メダル獲得のためには必要であるとの認識で臨んだ。

両選手共に良い状態で直前の調整練習を終え、十種の試合3日前の9月27日に選手村入りし、試合会場での直前練習やマルチサポートハウスの有効活用(身体のケア、専任コーチとのミーティング、食事など)などを行いながら順調に試合に臨んだ。

試合当日は日本よりもやや涼しい20度前後の気温と好天気のもと追い風にも恵まれ、第1種目の100mでは右代選手が11秒10、中村選手が10秒66(+1.7、自己ベスト記録)と幸先の良いスタートを切った(右代選手もこれまでの自己記録11秒14を上回る記録であったが+2.1の追い風参考記録であった)。

続く走幅跳で中村選手は7m36(+1.3)と順調に記録を伸ばしたが、アンドレーエフも100m10秒96のあと走幅跳7m28

をマークし調子の良さが窺われた。逆にカルポフは走幅跳が6m70に終わり苦しいスタートとなった。

右代選手は2回目に7m08をマークし、3回目の跳躍は会場の大型スクリーンに映し出された映像からも明らかに7m20のラインを超す好ジャンプであったが、記録は6m99。計測位置の間違いでとはすぐにその場の審判に口頭での抗議をしたが受け入れられず、記録は7m08のままであった。その後TICにおいて跳躍審判長、上訴委員会メンバーとともに映像を確認したが、跳躍審判長はユニフォームの端が砂場をかすったと主張して譲らなかった。結局上訴委員会の判定に委ねることとなったが、最終的に判定は覆らなかった。

このようなケースでは選手が即座にその場にいる審判員に「under protest」と伝え、記録の痕跡が消去されないうちにとりあえず記録を測定させておく手順の重要性を感じた。

右代選手はこのようなアクシデントにも左右されず、着実にその後の種目をこなし、初日終了時点では8308点の自己ベスト記録をマークした際の初日得点マイナス47点と8200点台の記録を期待させるペースとなった。中村選手も走高跳（1m99）などでの取りこぼしはあったものの7900点台後半が期待できるペースで初日を終えた。

二日目は右代選手、中村選手ともにややペースは落ちたものの右代選手は8000～8100点、中村選手は7800～7900点を狙えるペースで着実に試合を進めていった。種目によっては多少の取りこぼし（棒高跳：右代選手4m70、中村選手4m50など）は見られたが、両選手ともに大きく流れを崩すことなく試合を進められたことは大きな収穫であった。二日目に入りアンドレーエフが予想以上の好調さを見せると共にカルポフも投てき種目を中心に追い上げ、最終種目の1500m前ではトップのアンドレーエフと右代選手の差が32点で1500mの記録に換算すると右代選手が6秒差をつければ金メダル獲得という状況であった。また、この時点において6993点で5位の中村選手が3位のカルポフ（7123点）を抜いて銅メダル獲得するためには1500mで約20秒の差をつける必要があった。両選手及び他国選手の走力からすると十分勝算のある状況であったが、右代選手、中村選手には1500mを全力で戦って勝利することが十種競技の神髄であることを伝えてレースに送り出した。

結果は中村選手が序盤から積極的にペースを作るとともに右代選手もよいペースをキープ、それぞれ4分16秒53、4分43秒76で見事に金・銅メダル獲得を果たした（アンドレーエフ5分26秒72・総合得点7879点2位、カルポフ4分48秒86・総合7849点4位）。

今大会は来年の北京世界選手権、再来年のリオデジャネイロオリンピックへと繋がる重要な大会であったが、記録的・内容的にも評価できる結果であった。これをもとに来年の世界選手権では複数選手出場、本番で8200点台の記録をマークして入賞という目標を目指し、リオデジャネイロオリンピックに繋げていきたい。

競歩ブロック

今村文男

今大会のブロック目標として、男子競歩にて金メダル2を掲げた。ブロックの取り組みとしては、専任コーチや所属先スタッフと協力しながら、7月の長野県志賀高原からアジア大会へ向けた強化合宿を開始した。また、個人目標を達成するために個別性を重視しながらもブロックとして一体感のあ

る強化を行い、医事・科学委員会と連携を図り、個々のコンディショニングチェックを行いながらアジア大会へ準備を進めてきた。

種目ごとに総括すると、男子20km競歩においては、今季世界ランキング1位で金メダルを期待された鈴木雄介選手（富士通）は、序盤から積極的に優勝争いに加わり、優位にレースを展開していたものの、ラスト4kmで王鎮（中国）に引き離され1時間20分44秒で惜しくも銀メダルに終わった。金メダル獲得という目標は達成できなかったが、5月のワールドカップ競歩太倉大会（中国）での4位入賞を始め、今季は高いレベルで安定感がある結果を残していることを考えると確実に地力をつけてきている。今後の活躍に期待したい。

一方、同じくメダルを期待された高橋英輝選手（岩手大学）は、レース序盤は健闘したものの中盤から遅れだし、14km以降は大きくペースダウンし1時間24分04秒で7位となった。10km以降におけるレース展開の対応や後半のペースダウンの幅を見ても分かるが、経験不足と準備不足を認めない状況であったと考えられる。今後の奮起に期待したい。

男子50km競歩は、谷井孝行選手（自衛隊体育学校）が3時間40分19秒の自己記録で競歩史上初の金メダルを獲得し、山崎勇喜選手（自衛隊体育学校）は、45km地点で累積の警告により歩型違反で失格した。レースを振り返ると谷井選手は、レースプランが明確で想定したレース展開に応じたペース設定やその配分が勝利に繋がったと感じている。

特に今季の世界ランキングが上位であったこと、他国の競技者と自己記録の差があったことなどからスタートから自己記録を目標にレースを進めたことが功を奏した感じである。そして、中間点から徐々にペースを上げていくレース展開は世界のスタンダードと言える。ラスト5kmこそペースダウンしたが、気象条件や競うライバルがいればまだまだ記録を短縮できると感じている。来年の北京世界選手権では、是非、メダル獲得を目標にチャレンジして欲しい。山崎選手については、金メダル獲得の個人目標にこだわり過ぎ、仕上がりや自己の体調に応じたペース設定ができずオーバーペースによる影響で40km以降は徒歩状態になり45km付近で累積の警告により歩型違反で失格した。レース中の体調変化に応じて、第2目標、第3目標など目標修正が必要だったのではないだろうか。この点については、専任コーチやチームスタッフなどがスタートラインに立つまでのプロセスを振り返りレースの戦術面や目標設定をどうすべきだったかを検討してから次の大会へ向けてスタートを切って欲しい。

女子20km競歩の井上麗選手（天満屋）は、慎重にレースを開始したものの終始、単独歩となり、リズムが作れないまま5位でレースを終えた。メダル圏内の自己記録を保持していたことを考えると、積極的に序盤からレースの流れに乗っていくことが必要だったと考えられる。

今後の取り組みとして、IAAF競歩チャレンジなど海外競技会への積極的な出場と5000mや10000mなどのトラック種目における自己記録の更新を通して国際競技力向上へと繋げて欲しい。最後にブロックとして掲げた目標である金メダル2は達成できなかったものの男子競歩においては、充分に主要国際大会で結果を残せるレベルに到達してきた。今大会が来年の北京世界選手権や2016年リオデジャネイロオリンピックへ向けた試金石となった大会であったと言えるようにブロック一丸となって邁進していきたい。

「体育の日」スポーツ祭り2014報告

普及育成委員会 森 健

平成26年度「体育の日」中央記念行事スポーツ祭り2014が、文部科学省他の主催により、味の素ナショナルトレーニングセンター（味の素NTC）で開催された。スポーツ祭りは、多くのオリンピックがさまざまな種目に参加するビッグイベントであり、陸上競技は昨年度まで全国の都道府県で実施していたキッズアスリート・プロジェクト～夢の陸上キャラバン隊～と同様のプログラムで、特別開催し、日本陸連普及育成委員会の運営協力で行われた。昨年度までは、陸上教室として実施していたが、本年度はトップアスリートによるデモンストレーションと指導（レッスン）、そしてトップアスリートとの触れ合いを主たる目的とした陸上キャラバン隊として実施された。

開催当日の10月13日（祝・月）は台風の影響が懸念されたが、雨風ともに影響はほとんどなく予定通り開始されたが、帰宅時における台風の影響を考慮し全体の時間を短縮して実施された。また、小雨であったためグラウンド内の芝生は濡れていたものの、トラックは屋根があるため濡れておらず、実施するにあたり安全面は確保されていた。

参加児童数は、約80名であった。レッスンプログラムは、短距離・ハードル走とヴォータックス投げの2種類であり、児童を2グループ（約40名ずつ）に分け、ローテーションでそれぞれの種目を実施した。現役選手によるデモンストレーションでは、八幡賢司選手にハードル走、右代啓祐選手に走高跳、村上幸史選手にやり投を担当していただいた。小学生たちは普段体験することのない、ハードルの高さや走高跳のバーの高さ、やり投の投擲距離を間近で見ることによって、選手の高いレベルを肌で感じ、トップ選手のパフォーマンスに喜びと驚きをみせていた。

陸上競技の体験（レッスン）では、全体の時間を短縮せざるを得なかったため、子ども達の走る本数や投

擲回数が少なくなってしまったが、通常は日本のトップ選手しか使用できない味の素NTCの陸上競技場で走ることができたこと、また、限られた中でもトップアスリートと触れ合い、一生懸命に身体を動かしてくれたことは、貴重な体験になったと思われる。

短距離・ハードル走

短距離・ハードル走の指導者は、小島茂之氏（00年シドニーオリンピック代表）、八幡賢司選手（07年大阪世界選手権代表）の2名に担当していただいた。短距離走のためのドリルやミニハードル走について丁寧に指導をしていただいた。走り方のポイントなどを直接指導してもらったことで、走ることに意識がより高まったと思われる。

ヴォータックス投げ

ヴォータックス投げの指導者は、村上幸史選手（09年ベルリン世界選手権銅メダル）、右代啓祐選手（14年アジア大会金メダル）の2名に担当していただいた。2人組のペアでヴォータックスのキャッチボールから始まり、1人ずつの遠投を行った。続いて、コントロールを意識した的当てを行った。目標を設定し、チーム一丸となって一つの課題に挑戦することの大切さも指導していただいた。

このようなイベントは、陸上競技への興味関心を高めるきっかけ作りとして、今後も継続して開催していく価値のあるものと感じられた。



アジア陸上競技連盟(AAA)カウンシル会議報告

国際委員長 田中 克之 (AAA 副会長)

アジア陸上競技連盟 (AAA) の第79回カウンシル会議が、アジア競技大会が開催された機会を利用して、2014年9月25日に韓国・仁川 (インチョン) において行われたところその概要は次の通りである。

1. 出席者:

AAA: ダハラン会長 (カタール)、ドゥ第一副会長 (中国) はじめ、副会長5名 (イラン、タイ、カザフスタン、日本、インドネシア)、ニコラス事務総長 (シンガポール)、理事8名 (香港、韓国、台北、ベトナム、UAE、ヨルダン、マレーシア、バーレーン、ラオス)、全員が参加

IAAF (国際陸上競技連盟): ディアック会長、ジー・イズラム プロトコール及び加盟団体関係事項担当部長

2. ダハラン会長冒頭挨拶

(1) 自分は、最近開かれたマラケシュ (モロッコ) でのIAAFコンチネンタル・カップと台北で開催のアジアジュニア選手権に出席した。前者については、アジア・オセアニアチームは前回大会に続き4位であったが競技水準は上がったと思う。台北のアジアジュニア選手権は良い大会だった。エントリーの期限についてはその解釈に混乱が見られたようだがIAAFと同様の取り扱いにすべきだと思う。

(2) 2015年はアジアにとって重要な年になる。6月に武漢 (中国) でアジア選手権大会があり、その後8月には北京で世界選手権大会、そして武漢及び北京でのAAA及びIAAFの理事選挙である。

(3) 新設大会として、アジアユース選手権大会が、2015年5月3日に始まる週にカタールのドーハで開催される。アジアオリンピック評議会 (OCA) が主催して第4回アジア・ビーチ・ゲームズが2014年11月19~22日にタイのプーケットで開催され、ビーチ・アスレチック (陸上競技) 種目も含まれる。この大会での陸上競技種目実施について、今後とも採用するか否かを見るテストケースと考えている。

3. 広告代理店TSAとの契約問題

(1) 前回カウンシル会議議事録に関連し、田中より、広告代理店TSAにAAAのマーケティング交渉権を与える件についての自分の発言が記録されていないとして、新たに「AAAがマーケティング代理店をもつことは望ましいことである。しかし国内スポンサーを確保しつつ、国内大会と併催する形でAAAの大会を開催してきた加盟団体 (MF) は、以前と同様に国内

スポンサーを確保しようとするTSA側の同意やスポンサー収入の15%を手数料として支払う必要が出てくるため、AAA大会開催に消極的になる可能性がある。このためAAAがTSAと交渉する際にはこの点にも配慮の要がある」との文言の挿入を求めたところ異議なく了承された。

(2) これに関連して、財務コミッション副委員長であるドゥ第一副会長 (中国) から、既にTSAとは合意書にサインした。内容は「4年間に亘りTSAにAAAのマーケティング交渉権を与える」「TSAはAAAに対し4年間に亘り契約額を支払う」「交渉代理権が与えられる対象は全てのAAA大会とする」「TSAがスポンサーを見つけ出した場合、スポンサー料の一定割合をAAAに還元する」

(3) 田中及びコー理事 (香港) から「対象大会を明確にすべきだ」「契約内容を理事に知らせるべきだ」などの発言があり、ドゥ第一副会長及びダハラン会長から「出来るだけ希望に添った形で処理したい」(契約内容を公開するとの発言は無し) との発言があった。

4. 財務レポート

ニコラス事務総長より財務報告が行われた。形式的にはきちんとした報告であるが、2012年及び2013年とも収支は赤字となっている。このことからTSAとの話が上手くまとまりAAAの基礎財源となる金額を確保することが望まれる。

5. 戦略プラン

ダハラン会長より次のようなことが述べられた。

「戦略プランについては、前回会議でカウンシルの承認を得たが、自分はアジアに足りないのはFund (金)、コーチ、施設や器具、スポンサー、メディアの関心の高さだと思っている。このうち施設や器具についてはIAAFに頼らざるを得ないが、金、スポンサーについてはTSAとの交渉を上手く纏めること、コーチについてはアジアにもジャカルタと北京の2か所にあるIAAF地域普及センター (RDC) の有効活用とソリダリティ資金の有効活用、メディアの関心不足についてはAAAのWEBサイトを魅力的なものにすることからはじめたい」

6. 過去大会についての技術代表報告

- ① ユースオリンピック・アジア地域予選 (タイ・バンコク)
- ② 第16回アジアジュニア選手権大会 (台北)
- ③ アジア選手権20km競歩 (日本・能美)

の各技術代表から書面による報告が行われた。

①及び②は、日本の関幸生技術代表によるものであるが、カウンシルから「極めて詳細かつ客観的な立派な報告書である。今後の技術代表報告の参考になる」との評価が与えられた。③は、私（田中）による報告であった。日本陸連及び能美市等のこれまでの貢献及び大会開催に対する熱意を高く評価する一方、同大会をより国際水準の大会にするためとして次の提案を行ったところカウンシルはこれを了承した。

(a) 監督会議の充実

* 招集時間等を含むより詳細な競技注意事項を英文で席上配布すること

* スタート/フィニッシュライン、飲料等ステーション、トイレ等を英語で記載したコースマップを席上配布した上で説明すること

(b) 新しい往復コース採用の可能性検討

能美では一周2kmのループコースを採用しているが、国際的なトレンドは、正確な審判を行うため直線（あるいはそれに近いもの）の往復コース（Up & Backコース）を採用する方向に動いている。ついてはこのようなコースの採用が可能か否か検討をお願いしたい。

(c) 正式参加者数を加盟団体あたり最大2名とするものの検討

現在1加盟団体あたり正式参加選手数は男女各1名となっており、その他はオープン参加となっている。その結果、全体としてオープン参加者数が正式参加者数を上回る状況になっている。他方この20km競歩がアジア選手権の正式種目であった際は他の種目同様、1加盟団体最大限2名まで参加可能となっていた。このことを考え、主催者側の資金負担が増加することになるが、正式参加選手数を1加盟団体あたり最大限2名までとすることを検討して欲しい。

(d) 表彰式を国際大会に相応しいものとする

現在の日本型表彰方式から国際大会で標準になっている方針に変更すべきである（表彰者は8名ではなく3名、国歌吹奏、国旗掲揚を行う）。

7. 今後の大会に関する進捗状況報告

(1) アジア陸上選手権大会（2015年6月3～7日、中国・武漢開催）

書面での報告に加え、ドゥ第一副会長（中国）から「現地視察は、12月14日と3月15日に行う」旨発表があり、又カウンシルは技術代表としてアレックス・コンドラット副会長（カザフスタン）とコー理事（香港）、更に組織代表としてシュラボン副会長（タイ）を選ぶことを承認した。

(2) アジア・ビーチ・ゲームズ（2014年11月19～22日、タイ・プーケット）

書面での報告に加えシュラボン副会長より次の通り口頭発言がなされた。

(a) 競技種目は男女とも 60m、走高跳、走幅跳、砲丸投、クロスカンントリー（個人、団体）、4×60mシャトルリレー。

(b) 現時点で、16カ国（地域）の参加が見込まれている。

8. 今後の大会開催都市の選定

(1) 2015年アジアグランプリ：タイの3都市で7月に実施することを了承した。

(2) 第1回アジアユース選手権：ダハラン会長より改めて2015年5月3日の週にドーハ（カタール）で開催することを提案しカウンシルはこれを了承した。

9. アジア記録

(1) AAA事務局より2013年1月1日から2014年9月7日の間に樹立されたアジア記録及び最高記録の一覧が配布されカウンシルはこれを了承した。この中には日本人選手として藤光謙司選手（300m、32.25 於出雲：アジア最高記録）、桐生祥秀選手（100m、10.05 於熊谷：アジアジュニア記録）、松永大介選手（10000m競歩、39.08.23、於東京：アジアジュニア記録）、日本男子チーム（4×400mリレー、3.04.11、於ユージン：アジアジュニア記録）が含まれている。

(2) 何人かのカウンシルメンバーから「AAA事務局はIAAFが定める全ての条件（例えばドーピング検査、非機械的風速計の使用等）を満たしているか否か完全に見極めないまま記録承認することがあったが今後は必ず全ての条件を満たしていることを確認すべきである」との発言がなされた。そして記録の承認手続きは全てIAAFのやり方に一致させることにし、このためAAAの憲章や規則改正を行うことが合意された。

10. 次回カウンシル会議

次回のカウンシル会議は、暫定案として2015年2月25～26日にインドネシアのジャカルタで行うこととなった。日程について、ティゴール副会長（インドネシア）が出来るだけ早くこれを確認することとした。

11. その他

北京での次回総会の際に各加盟団体の会長及び事務総長が出席する会議を開催することとなり、オー理事（韓国）がこれの準備調整を担当することになった。

大会観戦ガイド

いよいよ駅伝&マラソンシーズン到来！
来年の北京世界選手権に向けて奮闘する選手たちにぜひご注目下さい！

青木半治杯 2014国際千葉駅伝

男女混合の駅伝となって8回目を迎える国際千葉駅伝！ 昨年、屈辱の2位であった日本チームの4年ぶりの優勝はなるか、千葉を舞台に繰り上げられる熱戦にご期待下さい。

- ▼日時：11月24日（振休・月）13：07スタート
- ▼会場（スタート・フィニッシュ）：
千葉県総合スポーツセンター陸上競技場
- ▼アクセス：JR千葉駅東口、千葉都市モノレール「スポーツセンター」下車。
- ▼コース：千葉市（千葉県総合スポーツセンター陸上競技場をスタート・フィニッシュとし、ポートタワー・QVCマリンフィールド・幕張メッセ・幕張ベイタウンを通る日本陸連公認マラソンコース42.195km）
【区間】6区間（男子3区間、女子3区間）
1区（男子5km）千葉県総合スポーツセンター陸上競技場～千葉市中央区道場北
2区（女子5km）千葉市中央区道場北～千葉県立美術館前
3区（男子10km）千葉県立美術館前～千葉市美浜区磯辺2丁目
4区（女子5km）千葉市美浜区磯辺2丁目～幕張メッセ前
5区（男子10km）幕張メッセ前～千葉市立花園小学校前
6区（女子7.195km）千葉市立花園小学校前～千葉県総合スポーツセンター陸上競技場



昨大会の様。3区区間新と快走した宇賀地強選手がタスキをつなぐ

- ▼テレビ放映予定：フジテレビ系全国ネット生中継
- ▼参加国・チーム（予定）：オーストラリア・カナダ・中国・エストニア・フランス・ドイツ・ケニア・ニュージーランド・ロシア・アメリカ・日本・日本学生選抜・千葉県選抜 全11カ国13チーム
- ▼問合せ先：国際千葉駅伝事務局（本局）
TEL：043-285-5891
- ▼日本陸連HP内大会ページ
<http://www.jaaf.or.jp/taikai/1216/>
公式ホームページ
<http://www.inter-chibaekiden.jp/>

第68回福岡国際マラソン選手権大会 兼第15回世界陸上競技選手権大会（2015／北京） 代表選手選考競技会

男子マラソンのトップランナーが福岡に集結！ 北京世界選手権代表の座を巡って、白熱の戦いを展開します。日本屈指の実力者たちが世界の強豪に挑みます。

- ▼日時：12月7日（日）12：10スタート
- ▼会場（スタート・フィニッシュ）：
福岡・平和台陸上競技場
- ▼アクセス：福岡市営地下鉄「大濠公園」駅下車徒歩8分、西鉄バス「大手門」バス停下車徒歩5分。
- ▼コース：福岡朝日国際マラソンコース（平和台陸上競技場・大濠公園～福岡市西南部周回～香椎折り返し）42.195km
- ▼参加標準記録：
【Aグループ】フルマラソン 2時間27分以内
30kmロードレース 1時間35分以内
ハーフマラソン 1時間05分以内
【Bグループ】フルマラソン 2時間40分以内
30kmロードレース 1時間50分以内
ハーフマラソン 1時間10分以内



昨大会の30km付近。外国人選手とともに、日本人選手が先頭でレースを進めた

- ▼テレビ放映予定：テレビ朝日系列等
12月7日（日）12：00～14：30（29局ネット）
- ▼問合せ先：福岡国際マラソン事務局（朝日新聞社西部企画事業チーム内）
TEL：092-411-1137
- ▼日本陸連HP内大会ページ
<http://www.jaaf.or.jp/taikai/1217/>
公式ホームページ
<http://www.fukuoka-marathon.com/info.html>

“日清食品カップ” 第17回全国小学生クロスカントリーリレー 研修大会

全国から小学生の精鋭たちが大阪に集結！ 一生懸命走る金の卵たちに、大きなご声援をお願いします！ 昨年度より日程が12月に変更となりました。

- ▼日時：12月14日（日）
- ▼会場：大阪・万博記念公園特設コース
- ▼アクセス：
 - 阪急線：南茨木駅、山田駅、蛍池駅
 - 地下鉄御堂筋線（北大阪急行線）：千里中央駅
 - 地下鉄谷町線：大日駅
 - 京阪本線：門真市駅から大阪モノレール「万博記念公園駅」もしくは「公園東口駅」
 - JR線：茨木駅からバス
 - 阪急京都線：茨木市駅からバス
- ▼種目：
 - 11：30 友好タイムトライアルレース
チーム対抗リレーに参加できなかった50チームの男女各1名が出場。
 - 11：50 チーム対抗クロスカントリーリレー
全国50チームが参加、6区間（1区間1.5km）の総合タイムで順位を決定。1・3・5区が女子選手、2・4・6区が男子選手。



昨大会の、女子のスタート風景

- ▼出場チーム：各加盟団体の推薦を受けた、全国47都道府県から各1チームと開催地（大阪）から3チームの、合計50チームが出場。
- ▼問合せ先：日本陸上競技連盟事務局
担当：藤代・鈴木
TEL：03-5321-6580 / FAX：03-5321-6591
- ▼日本陸連HP内大会ページ：
<http://www.jaaf.or.jp/taikai/1218/>

平成26年度全国中学校体育大会 第22回全国中学校駅伝大会

- ▼日時：12月14日（日）
 - 女子 11：00スタート
 - 男子 12：15スタート
- ▼会場：山口県セミナーパーク・クロスカントリーコース
- ▼アクセス：JR山陽本線新山口駅から約10km（タクシー約15分）、四辻駅から約3km（タクシー約5分）。山陽自動車道山口中IC.から車で約5分。中国自動車道小郡IC.から車で約20分。
- ▼コース：山口県セミナーパーク・クロスカントリーコース
 - 男子の部（6区間18km、各区間3km）
 - 女子の部（5区間12km、1・5区3km、2・3・4区2km）
- ▼問い合わせ先：
 - 全中駅伝事務局（山口市立白石中学校内）
TEL：083-924-8997 / FAX：083-902-7007
- ▼日本陸連HP内大会ページ
 - <http://www.jaaf.or.jp/taikai/1219/>
大会公式ページ
 - <http://www.diciotto.com/ekiden22/>



好天に恵まれた昨大会。写真は男子のスタート風景

陸協NEWS



JAAF
MIYAZAKI

一般財団法人宮崎陸上競技協会

〒880-0022 宮崎市大橋2-6-1 ヤヨイビル5階
TEL.0985-25-6011 FAX.0985-25-6011
<http://www.miyariku.org/>

九州地区での6年ぶりの開催となった「長崎がんばらんば国体」において、本県は9種目で入賞しました。この成績は、短距離、障害、跳躍、投てき種目での入賞であり、多種目にわたっていました。投てき種目においては、砲丸投、やり投、円盤投、ハンマー投の投てき全種目にわたって入賞者を出したことは特筆すべき事です。今回のこの成果は、強化部を中心とした本県指導者のこれまでの努力が結実し、形となって現れてきたのだと思います。今後この成果を継続できるよう、普及体制を整え現場の指導者を支援していきたいと思ひます。

宮崎女子ロードレース大会が終了し、その後継大会として2012年から行っている「ひむかレディーストライアル」は、今年で4回目を迎えます。1月5日(月)に、女子選手を対象に3000m、5000m、10000mの3種目を実施します。宮崎や近県で合宿している実業団チーム、県内外の中学、高校、大学と各世代の選手が参加しております。今年も多くの選手に出場して頂きたいと思ひます。

1月12日(月・祝)には、5回目を迎える「宮崎県市町村対抗駅伝競走大会」を開催します。参加チーム数は年々増加し、昨年度は39チームが参加しており、小・中・高校生から一般、40歳・50歳以上の計12区間を、郷土の期待と誇りを胸に健脚を競います。スタート、ゴール地点となる県庁前楠並木通りでは、例年通り各市町村の特産品を販売・展示する物産展を行っています。それに加えて今年度は各市町村のゆるキャラを一堂に集める「ゆるキャラ祭り」を実施します。今後も大会を盛り上げ、市町村の活性化にもつながるような試みを行っていきたく思ひます。(文責:理事長 申間敦郎)

JAAF
OKINAWA

沖縄陸上競技協会

〒900-0027 那覇市山下町18-26
沖縄県住宅供給公社2階B棟208号室
TEL.098-996-2881 FAX.098-996-2882
<http://www.jaaf-okinawa.jp/>

沖縄投擲伝説～沖縄からオリンピック選手輩出を目指して～

沖縄県の陸上競技において、特に成果をあげている投擲種目はこれまで多くの全国制覇や高校日本最高記録・ジュニア日本記録等を樹立している。インターハイにおいては、昨年度までに、優勝10名・2位9名・3位4名・4位7名・5位8名・6位5名・7位2名・8位2名の合計47名が実績を残している。大学進学後もインカレや日本選手権で優勝や入賞を果たしている。今年度の大きな成果として、6月に台北で開催された第16回アジアジュニア選手権のやり投で當間汐織選手(久米島高校出身・九州共立大学)が55m75の自己新記録で金メダルに輝いた。

離島県で競技力向上の情報が少ない中、主に次のような創意工夫で取り組んでいる。①週末毎に合同練習会の実施 ②前年度よりインターハイや国体強化指定選手を公表し高い意識を持たせて県外大会・記録会及び合宿に強化費を支給して参加させる ③合宿で来県した日本陸連ジュニア合宿の協力を得て県強化指定選手として参加させる ④8月のインターハイ帰りと12月の九州ジュニア合宿後に宮崎県・福岡県に派遣し強化合宿に参加させる。

2020年東京オリンピックへ、沖縄から選手輩出を目指して今後も取り組んで行きたい。(文責:総務部長 知念信勝)

JAAF
KAGOSHIMA

一般財団法人鹿児島陸上競技協会

〒890-0062 鹿児島市与次郎2-2-2 鴨池陸上競技場内
TEL.099-259-6053 FAX.099-299-6054
<http://www3.synapse.ne.jp/karikupage/>

鹿児島県は、平成32年の東京オリンピック開催年に国体の開催が決まり、選手強化が今まで以上に重要になってきました。そのような状況の中で今年の夏に嬉しいニュースが飛び込んできました。

まず山梨県で行われた全国高校総体の女子1500mで倉岡奈々選手(鹿児島女子高2年)が4分20秒82で優勝。さらに香川県で行われた全日中の男子走高跳で久保木春佑選手(鹿児島第一中3年)が1m96で優勝。神奈川県横浜市日産スタジアムで行われた全国小学生陸上競技交流大会の男子走幅跳で瀬崎勝太選手(出水市陸上6年)が5m34で優勝。何と小中高の3世代に渡り全国優勝を飾ってくれました。

各世代で全国優勝が生まれたということは、陸協強化部を始め、学校や地域の指導者、家庭などの取り組みの成果であり、更にこれからの強化策にも大きな弾みを付けるものになりました。また、鹿児島国体における県選手団の活躍にも大きな希望を持たせるものになったと思ひます。

国体開催までは選手強化だけでなく、施設や設備の充実、審判技術の向上、競技運営・情報処理の充実など課題は山積みですが、これからの6年間を鹿児島陸協が一丸となり国体に向けて頑張っていきたいと考えています。(文責:記録部長 麻生貴宣)

事務局からのお知らせ

◆◆公式動画サイトに、日本選手権リレー・ジュニアオリンピックを公開!◆◆

日本陸連公式動画サイト「JAAF JAPAN ATHLETICS TV」では、10月31日(金)～11月2日(日)に神奈川・日産スタジアムで開催した第98回日本陸上競技選手権リレー競技大会・第45回ジュニアオリンピック陸上競技大会の全種目の決勝動画をアップしています!リザルトを見ながら高品質の動画をぜひお楽しみ下さい!

アクセスは <http://japanathletics.tv/> まで

※ 6月6日(金)～8日(日)に福島・とうほう・みんなのスタジアムで開催した第98回日本陸上競技選手権大会の動画も好評公開中です!



写真は昨年のジュニアオリンピック男子B100m決勝の様相

◆◆Facebookを始めました◆◆



日本陸連では8月よりFacebookページを開設しました。

各種大会や代表選手の情報、普及育成事業などさまざまな情報を発信していきます。是非下記にアクセスしてください。

<https://www.facebook.com/JapanAthletics>

◆◆メールマガジン配信中!◆◆

日本陸連公式メールマガジン「JAAFアスレティックメール」を好評配信中です。登録は <http://mm.jaaf.or.jp/mailmagazine> か、右のQRコードから!



陸連時報編集委員

◇編集委員

横川 浩 (陸連会長)
三宅 勝次 (陸連副会長)
友永 義治 (陸連副会長)
尾縣 貢 (陸連専務理事)
原田 康弘 (陸連強化委員長)
風間 明 (陸連事務局長)
高橋 克実 (陸上競技マガジン編集長)

◇時報編集室責任者

森 泰夫
◇時報編集担当
繁田 進
石塚 浩
木越 清信
宮田 宏
本田香代子
森谷 真咲

陸連時報編集室

〒163-0717
東京都新宿区西新宿2-7-1
小田急第一生命ビル17階
公益財団法人日本陸上競技連盟 内
TEL 03-5321-6580
FAX 03-5321-6591
ウェブサイト <http://www.jaaf.or.jp/>
公式動画サイト <http://japanathletics.tv/>